

朱元撰著

現行日語文法改進說

中國文化學院出版部印行

目 錄

第一編 品詞概說	一
第一 文法與古今語之注音符號	一
第二 句與句節	五
第三 單語（品詞）	一一
第四 單語之分類（品詞分類）	一五
第二編 品詞改進說	一九
第一 体言	一九
第一節 名詞、代名詞	一九
第二 用言與活用	二八
第二節 動詞	二九
第三節 形容詞	四九
第四節 形容動詞	五三
第五節 副詞	六四

第六節 連体詞	六八
第七節 接續詞	六九
第八節 感動詞	七三
第九節 助動詞	七三
第十節 助詞	九一
第三 結語	一三〇

現行日語文法改進說

第一編 品詞概說

第一 文法與古今語之注音符號

文法者、文章之作法也。文章以單句爲基礎、單句以句節爲基礎、句節以單語爲基礎、單語於文法中稱爲品詞。於古語與今語中、品詞之注音符號、多有相異之處。以致古今文法、亦有所不同者焉。古語注音符號、以現今注音之目光視之、其不同事例頗多。例如蝴蝶之「蝶」字、今之注音符號爲「ちよう」「三仮名。在古語中普通爲「てふ」兩仮名之注音符號。其所注之「てふ」兩仮名、讀音與「ちよう」三仮名之讀音相同一點、爲一般所不易瞭解。

(一)音韻之變化 上項不同、究其根源、乃由於音韻之變化而來。「蝶」字曾注爲「テフ」兩片仮名之發音、是以注成「てふ」兩平仮名。因時代之交遷、而注音發生變化。「テフ」之注音、遂成「チョー」之注音。今之發音、就「チョー」之發音、而注音爲「ちよう」者是也。類似此種事例、確屬頗多。略舉數例以明之。

①將「アウ」兩仮名、一併發音時、成爲一個仮名之長音爲「おー」。在注音上如「猛」字、注成「

まう」→「もう」。「様」字注成「やう」→「よう」「高う」一字、注成「たかう」→「たこう」「美味そう」一語、注成「うまさう」→「うまそう」等。

②「いう」兩仮名、一併發音時、讀成「ユー」之音。在注音符號上爲「あやしう」→「あやしゅう」。「おやかましう」→「おやかましゅう」「左右」兩漢字之讀音、註成「さいう」→「さゆう」。「お早う」注成「おはやう」→「おはよう」。「急」一漢字、注成「きう」→「きゅう」等。

③「エウ」兩仮名、一併發音時、讀「ョー」之音。在注音符號爲「稀有」兩漢字之發音、注成「けう」→「きよう」、「教訓」兩漢字之發音、注成「けうくん」→「きようくん」「氣疎」兩漢字之發音、注成「けうとし」→「きようとし」等。

④「オウ」兩仮名、一併發音時、讀成「オー」之音。但此一語、在注音上並無變化。

(二)「ちとじ」づと 現代語中、「ち」與「じ」「づ」與「ず」雖兩相同音、但因原有區別、是以各「づ」之關係 語、所注仮名、各不相同。

現代注音、除少數特定場合外、一律作「じ」「ず」之注音。現代注音中、「じ」如「耻じる」「閉じる」等、在古典語中、則用「ぢ」行仮名、注成「耻づ」「閉づ」。現代語中註用「ず」爲「たずねる」「たずさわる」等、在古典語中、則注用「ぢ」行「たづる」「たづさわる」等是。此與特定語活用、有密切關係、須特別注意。

(三)「ハ」行之注音符號 語詞之注音符號、於開始以外、用「ハ」行仮名注音時、在昔之注音中、(古典語)

如「川」「灰」「言ふ」「思ふ」「家」「顔」等注用「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」者、現代注音、則注用「わ」「い」「う」「え」「お」如「川」「灰」「言う」「思う」「家」「顔」等、即注用わ行之「わ」及あ行之「い」「う」「え」「お」等仮名、此等發音、原用は行之読轉呼音爲「わ」「い」「う」「え」「お」者是。

〔四〕現代注音所不得使用之仮名

現代於五十音圖中、や行祇用「ヤ」「ユ」「ヨ」而缺イ段エ段、ワ行中祇用「ワ」「ヲ」而缺「イ」「ウ」「エ」三段。於往昔之注音中、ヤ行中之「イ」「エ」及ワ行中之「キ」「ウ」「エ」等三行、均經使用。在現代注音中、例如「息も絶え絶え」一語中之「え」仮名、係屬ア行者。於昔之注音中、其所用者、雖同爲「え」仮名、但係屬ヤ行之「エ」而非ア行之「エ」。因「絶え」一語、乃一動詞、其終止形爲「絶ゆ」、「ゆ」屬ヤ行之仮名故也。語尾活用、以同一行內之仮名、交替爲原則、是以認其爲ヤ行中之「え」也。至於前述「ハ」行問題、於古典語中、無如現代語中「ワ、行五段活用之變態名稱。在現代語中之注音、如「思う」一語、其語尾注音爲「思わない」「思おう」「思います」等、其語尾活用及於ア、ワ兩行、成爲ア、ワ行五段活用動詞。但在古典文法中、則爲「思はず」「思ひたり」「思ふ」……」等活用、係「ハ行」內之仮名、交替活用、純屬「ハ行」四段活用之讀轉呼音者也。

現代語如ア行所屬之動詞中、於古典文法中、以屬ヤ行者居多。在「絶ゆ」之對「絶える」之類例中、有「見ゆ」、「覺ゆ」、「梅ゆ」等、應注意兩者之區別、不得混合。

右例於ワ行中亦有之。如「居る」「用いる」等動詞、現代語屬ア行。於古典語中、其注音爲「居る」「用ゐる」、乃屬ワ行。又如「据える」一語、古典語中、其語尾活用爲「すゑ」「すゑ」「すう…」等、屬ワ行者是、亦応注音。

〔ん〕はねる音、つまる音

撥音（ん）促音

於日本語中、原無音便一項、至平安時代、方始成立音便且普遍化。如現代語之用「ん」（撥音）及「つ」縮小字體注音之確立、而成定則者、乃屬後代事。於平安時代、並未特作符號、或注「い」仮名、用以表示。如助動詞「めり」、「べし」等、承接於ラ行來格活用動詞型之活用語尾時、成「あめり」「あべし」等、蓋爲音便化前之「あるめり」「あるべし」之音便化。（想或原爲「ありめり」「ありべし」之撥音便化、而未注明符號）但於誦讀時習慣上添加「ン」即成「アンメリ」「アンベシ」而讀者也。

如日記兩漢字、雖注有「にき」、「熱す」注有「ねす」之符號。在未注音便例中、其促音便未如現代語之注明「ッ」之符號也。

又如「天氣」兩漢字、在「土佐日記」中、注音爲「ていけ」、想或此爲表示填入母音字母之例。蓋實際上之發音、原非「イ」而爲「ン」也。古典語與現代語之注音、多有不同、事關誦音、應予注意。

第二 句与句節

①句与文、一般說來、合爲一體。就文法立場而言、實有區別。文法上所稱句者、乃一表達「思想」或「所感」之文字。進而敘述繁複「思想」或「所感」時、乃由句與句相疊而成文。文者文章之謂也。就文法而言、文章之最小單位、加注「。」之符號處爲句。故於句之終結處、定須加注「。」之符號。所於會話時、在「。」處必作一停頓。遇長句時、爲避免會錯意義、或誤讀時、而加注「、」之符號。所謂句者、乃敘述一個思想或感情之文字。文章者乃聚集數多句意而表達一個具體的思想或感情之文字也。

②句与句節之成分

句節者即全句中之一節也。一個完全單句、最少須有兩個以上之句節、方得構成。舉一日文例句、用以說明。

そこへ、近所の医者が看護婦をつれてきました。

右列例句、於每個助詞下、介以「ネ」仮名、細別而讀之、乃爲そこへネ、近所のネ、医者がネ、看護婦をネ、つれてネ、きました。於每個助詞處、爲構成單句之最小單位、稱爲句節。句節者、乃單句之結構成分也。單句之成分中、有主語、有說明語、有修飾語、有獨立語、有附屬語、有接統語等。

③句節与句節之關係

句者雖亦有由一個句節而成者、但此爲極少數。一般單句、皆由兩個以上之句節構成。茲將句節与句節間之關係、例示如左。

一、主語与說明語之關係

1 風が吹く。 2 夕日が美しい。 3 これが学校だ。

右列諸例句、各由兩個句節而成。每句中第一句節「風が、夕日が、これが」等、均附有「が」之助詞。即何がどうする。(風が吹く)。何がどんなだ。(夕日が美しい)。何がなんだ。(これが学校だ)等句中之「何が」爲主語。

右列諸例句中之「吹く、美しい、学校だ」等、乃表示「どうする、どんなだ、なんだ」等意者、爲說明語。普通語句之結構、主語在最上、說明在最下、是爲定則。

A. 主語由兩個以上句節而成者、亦有之例。

ぼくと 弟が 行つた。

右列例句、由三個以上句節而成。「ぼくと、弟が」兩個句節、連成一起、而成主語。

B. 說明語由兩個句節而成者、亦有之例。

道は、わるくて 遠い。

右列例句爲「道は、わるい」「道は、遠い」之意。即「悪くて」、与「遠い」連成一起而成說明語。

し、説明語不用「どうする、どんなだ、なんだ」等方式、而採用「疑問、願望、詠歎、禁止、命令」方式者、亦有之例。

勉強はすみまじたか。 私も行きたいなあ。

いたずらは よせ。

D. 日本語單句之構造、多有省略主語、或説明語者之例句。

また（空が）晴れてきた。（私は）お茶を のみたい。

「島が見えるよ」→「ええ、島が（見えるつて）？」。

E. 主語之下、不限定承接助詞「が」、而承接「は、の、も、こそ、でも」等各種助詞者亦有之例句。

海は広い。山田さんも行く。さくらの咲くころ。

私こそ よろしく。 子供でも 出来る。

二、修飾語与被修飾語之關係

涼しい風が、そよそよと 吹く。

此處「涼しい」一語、乃明白説明「如何的風」。「そよそよと」一語、乃説明「風の魔法」。此處之「涼しい」、「そよそよと」兩語、稱修飾語、其被修飾之「風が」「吹く」兩語、稱被修飾語。即句節之詳爲説明下位之句節者、爲修飾語、其被修飾者、爲被修飾語。

A. 修飾語、有修飾事物者、有修飾動作或狀態者、前者稱連體修飾語、後者稱連用修飾語。例左

「いい風が そよそよと吹く。そんなことは少しも言わなかつた。上句中之「涼しい」和「そんな」語、爲連體修飾語。「そよそよと」与「少しも」兩語、爲連用修飾語。

D. 修飾語、不僅修飾主語或說明語、修飾其他修飾語者亦有之例句如左

よく晴れた空が どこまでも あおい。

右例句中之「よく」一語、係修飾「晴れた」一語、「晴れた」一語、係修飾「空が」一語者。如修語增多、則語句之結構、亦隨之複雜化。反之、於複句中、將修飾語除去、乃呈語句之基本組織。

C. 重複修飾同一句節之修飾語句節例左。

國旗が ひらひらと、風に なびく。

右例句中之「ひらひらと」与「風に」兩修飾語、乃說明主語「國旗」「どのように」なびく」。(國旗如何的飄)「國旗が」何によつて「なびく」。(國旗由於什麼東西而飄)其「ひらひらと」与「風に」之間、無修飾語與被修飾語關係、而成「國旗がひらひらとなびく」「國旗が風になびく」之句。即「ひらひらと」与「風に」兩語、成重複修飾同一句節之修飾語句節。

三、獨立語

● まあ、すてき ● はい、承知致しました ● 太郎やごはんよ

右列諸例句中、附有「線」之句節、爲表達感動、承諾、呼喚等意、與其他句節、無直接關係、爲一具有獨立性之句節。此類句節、稱獨立語。

四、接統語

● 宿題をして それから 散歩を した。 ● 歴史及び地理を學ぶ。 ● 雨がやんだ。そして
日が さしてきた。

右列諸例句中、附有―線之句節、乃負有連接前語與後語、或前句與後句關係之單語、此類單語、稱接統語。接統語亦有連接文章中之段與段者、此亦稱獨立句節。前稱獨立語、與其他句節、不生關係。但接統語、與其他句節、有深切關係。亦有與句之結構有關者、故不得歸入獨立語之中。

五、對等關係句節、兩個以上句節、並列於同等立場者、稱對等句節。

A. 太郎と花子は學生です。 B. 青年は空想やあこがれを持つべきである。 C. 山は高くてけわしい。
い。

右列例句中
A. 太郎と花子は學生です
主語 說明語 主語 受語 說明語 主語 說明語
花子は 學生です
B. 青年は空想やあこがれを持つべきである。
C. 山は高くてけわしい

右列例句A.句中之「太郎と」と「花子は」、B.句中之「空想や」と「あこがれを」、C.句中之「高くて」と「けわしい」等語、爲立於對等立場、具有A.主語、B.受語、C說明語作用、此等句節、稱對等關係句節。

六、補助關係句節 前句節表達重要意義、後句節有補助作用、稱此句節爲補助關係句節。

A. わがはいは ねこで ある。

B. 白菊が きれいに 咲いて いる。

右列句節中附有——線之句節、係表達前句節之重要意義、而「ある」「いる」兩語、乃有補助完成語句之作用。A. 句中之說明語爲「ねこである」。B. 句中之說明語爲「咲いている」兩句中說明語之重點、前者在「ねこで」、後者在「咲いて」、前句說明語中之「ある」、後句說明語中之「いる」兩語、有補助作用、稱具有此種作用之句節、爲補助句節。

第三 單語（品詞）

（一）單語

① ねこのくびに鈴をつける。

② ねこがくびの鈴を ならす。

③ ねこに かつおぶしを やる。

右列諸例句中之「ねこの」「ねこが」「ねこに」等句節中之「ねこ」一語、爲共通語。又「くびに」「くびの」等句節中之「くび」、亦爲共通語。又「鈴を」「かつおぶしを」等句節中之「を」、亦屬共通語。將此等兩個以上之句節中之共通分部摘出、稱此等摘出部分爲單語。

（二）句節與單語

句節、實際上在語文中、爲最小單位。單語者乃將句節再行細分之單位也。若由此再作分解、則有損句意、稱此細分之單位爲單語。單句乃集句節而成、句節乃集單語而成。由一單語而成之句節雖有、但普通句節、多由兩個單語而成。

（三）獨立語與附屬語

「ねこの」、「ねこが」、「ねこに」等句節、各由「ねこ」之單語下接助詞「が」、「の」、「に」等單語而成。「ねこ」之一單語、有如「犬、ねこ、にわとり」などは家畜です。「一句中之「犬」、「ねこ」、「にわとり」然、亦得各自成爲一個句節。稱此種句節之單語爲獨立語。所附之「が」、「の」、「に」等單語、不能成爲句節、通常皆須附於一個獨立語下、兩相合成一個句節使用。此類單語、稱附屬語。右列例句中之「犬、ねこ、にわとり、家畜、ある」等爲獨立語、「など、は、で」等爲附屬語。一個句節中、祇有一個獨立語。集數個單語而成一個句節者、於一個獨立語之外、餘爲附屬語。

四單語之語形與活用

(1)單語之語形——如「雪、月、花、風」、「そよそよ、しかし」等單語、恆爲定形、無變化之可言。如「読む」、「歩く」、「大きい」等單語、於使用時、有一定之語形變化。

(2)有語形變化之單語

①如「読む」一單語、其語形有如左之變化。

- 本を読まない。
- 本を読もう。
- 本を読みます。
- 本を読む。
- 本を読むひまがない。
- 本を読めばよい。
- 本を読め。

②如「ます」一單語、其語形有如左之變化。

- まだ読みません。
- もう読みました。
- きつと読みます。

右列兩例句中之「読む」及「ます」兩單語、其語尾部分、呈多種語形變化。此種變化、名之爲活用。

石列例句中之「読む」一語、爲獨立語、而「ます」一語、爲附屬語。由此可知、在獨立語及附屬語中、多有語形活用之單語。反之、如「月、雪、花、風」等單語、無語形變化。無語形變化之單語稱無活用語。

(五) 複合語

於單語中、有含兩個以上單語、表達一個意義、而成另一新單語。此種單語、在文法上、稱複合單語。複合單語之功用、與原來單一單語時同。例左

● 青空（青い、空、そら→ぞら） ● 酒樽（さけ、たる、さけ→さか、たる→だる） ● 木の葉（木、の、き→こ） ● 人々（人、人、ひと→びと） ● 重ね重ね（重ね、重ね、かさね→がさね）。成複合語時、其下位單語之音、或成濁音、或變更其上位單語之音、或變更其アクセント（重音）者有之。

(六) 接頭語、接尾語

在單語中、有單語與非單語、結合而成另一單語者、此種單語、亦與複合語同樣有或說濁音、或變更其アクセント（重音）者。

例左。

● 刈米 ● ご苦勞 ● ま夜中 ● こざつぱり ● 田中くん ● 六番め、● 春めく。

右例字中、附有一線部分、不能單獨使用、必須附於另一單語、而合成一個單語。此種單語、較原有單語、或添加意味、或在文法上之性質、有所變更。其接於單語之上部者、稱接頭語、其接於單語之下部

者、稱接尾語。

(二)單語之組織

複合單語、與原單語之意義、雖說相同、但亦有稍有不同之處。例左。

●「本を読む」一句、不若 ●「ご本を読む」一句之爲尊敬。更成「読書」一語時、乃成另一單語。

據此單語之組織、試舉左列三種方式。

①由於一個單語者——山、川、草、木、風、月。

②由兩個以上單語、組織而成一單語者。

A. 複合語——山ざくら、●投げ売り、●夜長、●われわれ、人々。

B. 熟語——山脈、●河川、●草木、●風雨、●分解。

③附有接頭語、接尾語者——お菓子 ●す足 ●寒さ ●ぼくら ●友だち。